

令和6年度「博士大学院生のCHIの交流会」 参加者様募集について

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は、本協議会の趣旨・活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。この度、博士大学院生のCHIの交流会（Curious Human & Intelligence Interaction）を開催いたします。本イベントは、大学での研究に邁進する博士・修士課程の学生の皆さんが、異なる研究環境／異分野の人々との、学会や研究会とはまた違った研究交流を通して、新たな気づきを得るとともに、各々のプレゼンスキルや異分野コミュニケーション能力の確認・向上につなげてもらうために開催いたします。

今や企業・大学関わらず、異分野異業種との共同は避けられない世の中になってきております。本交流会では、3分間の研究アピールをまず学生の皆さんにさせていただき、その後の自由交流でより深い研究交流をしていただくプログラムとして企画しております。企業の皆様におかれましては、学生に率直なご意見・アドバイスをいただくとともに、博士人材となる学生の皆様の研究への取組み姿勢やモチベーション、価値観、研究に対する想い等に触れられる相互理解深化の機会として、是非ご参加ご検討をいただけましたら幸いです。

企業・大学関わらず、各分野の研究者、技術者、開発者の方々、人事部門の方々などに、是非ご参加いただき、今後を担う博士人材を共に応援していただければと存じます。ご多用のところ大変恐縮ではございますが、ご参加ご検討の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

敬具

【企画名】博士大学院生のCHIの交流会

【開催日時】（予定：全2回開催）

【開催方法】オンライン開催（oVice） <https://c-engine.ovice.in/>

※oVice公式サイト：<https://www.ovice.com/ja>

【発表学生】C-ENGINE 会員大学所属の大学院生（6名・予定）※別表参照

※聴講学生、教職員も参加します。コンソーシアム内での産学間の自由な交流の場として
ご活用ください

【次第案】

- ・ 15:00-15:05 開会・イベント説明
- ・ 15:05-15:10 C-ENGINE についてのご説明
- ・ 15:10-15:35 参加学生の3分間研究アピール・自己紹介
- ・ 15:35-17:00 自由交流

※参加者数により、若干の変更の可能性がございます。

※当日は発表学生だけではなく、傍聴学生も参加予定です

一般参加対象：C-ENGINE 会員大学大学院生、C-ENGINE 会員大学教職員

※自由交流について：

- ・発表学生はそれぞれの持ち場をもち、そこで詳細の研究説明を実施いたします
- ・各自 oVice 上で自由に移動いただき、リアルのパスター発表のような形で自由交流をお願いします

・学生側から話しかけさせていただくこともあるかと存じます。可能な範囲でご対応いただけましたら幸いです

・学生はできる限りわかりやすく、興味をもっていただけるような説明を心がけますが、異分野交流の経験が浅い学生もおりますので、温かい目でご指導いただけますと幸いです

・学生の多くは「企業の方が自分の発表を聞いてどういう印象を受けるか」を単純に知りたいと思っていますので、率直な意見・コメントをいただければ幸いです

・研究の専門的な中身のご議論をいただいても結構ですが、彼らが実施する研究の意義、重要性や、そのテーマにどれだけ一生懸命取り組んでいるか、課題・困難をどのように乗り越えた（乗り越えようとしている）か、といった点においても注目し、コミュニケーションをとっていただけましたら幸いです

【注意事項】

- ・当日使用する oVice が利用可能か、テスト接続をお願いしたく存じます
- ・C-ENGINE の oVice スペースは常時開放しておりますので、お気軽にご利用いただければと存じます (<https://c-engine.ovice.in/>)
- ・ご参加お申込みの方には簡易マニュアルを配布予定です
- ・oVice 公式サイト：<https://www.ovice.com/ja>

【参加申込】

C-ENGINE 事務局 (contact@c-engine.org) まで、ご所属、お名前をご連絡いただくか、下記フォームよりご登録ください (Google フォーム)

<https://forms.gle/Rw19bDbeF2RJvZD99>

お問い合わせ先：

一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会 (C-ENGINE) 事務局

contact@c-engine.org

075-746-6872

別表：発表予定の学生一覧（順不同）

発表者氏名・所属	取り組んでいる研究テーマ	本イベントへの意気込み
1 玉井 隼 筑波大学グローバル 教育院ヒューマニクス 学位プログラム M1	排泄機能改善に向けた、装着型サイボグを用いた体幹深部筋群の賦活化に関する研究開発	ほとんどの人間がいずれ体験するであろう「排泄障害」。この研究では未だに根本的な治療法が確立されていないこの問題に対する新しいアプローチ法を提案している。
2 間瀬 葵 奈良女子大学人間 文化総合科学研究 科生活工学共同専 攻 D1	私が現在行っている研究のテーマは、「 発達・加齢に伴う感覚ー運動機能に関する研究 」です。保健体育の教員免許を取得する過程で、運動が得意な子どもたちとそうでない子どもたちの違いについて気になったことがきっかけとなり、この研究を始めました。両親からの遺伝や、教育環境など、子どもの「運動神経」へ影響を与えるものはさまざまありますが、私が専門としている脳科学や神経科学の観点から、運動能力を決定づける要因について明らかにできることはないかと考えています。さらに、子どもに限らず、身体の健康維持のために適度な運動が必要であるとされていますが、どのような運動がどれくらい必要かは個人によって異なります。将来的には、健康増進、ストレス解消のために行う運動に関し、適切な量や方法を個人の特性に応じて選択し、実施することが可能になるよう、運動機能を予測するバイオセンサーについて、脳活動から解明しようと研究を進めています。	私が行っている研究が発展していけば、体育教育やリハビリテーション現場の領域において、個人の特性に応じたプログラムを作成するための知見になると考えています。近年、「多様な価値観」や「ダイバーシティ」というワードが広く認知され、さまざまな場面において個人による選択が可能になり、また、それが重要視されるようになってきました。健康維持のために行う運動についても、今後、一人ひとりにマッチするプログラムを選択できるような時代へ導くために、私は研究を進めます。昨年、聴講者として CHI の交流会に参加しました。自身の研究について誇らしく発表する博士学生の皆さんの姿を見て、「私もこうなりたい」と思いました。あれから約 1 年が経ち、私は博士課程へ進学し、やりたい研究をすることができています。今回、CHI の交流会を通して自身の研究についてその面白さや有用性について広く知っていただくことで、今後の研究活動の幅を広げていく貴重な機会になると思っています。また、大学で研究を進めていく中で、他領域で研究を行っている学生や、企業の方と交流する機会がないので、今回のイベントにて、さまざまな方とコミュニケーションを取り、意見を交換できることを期待しています。
3 宮崎 仁美 東京都立大学システ ムデザイン研究科 D1	「起立性調節障害の長期化防止に向けたシリアスゲームの開発」 近年、中学生に多い自律神経系の病気である起立性調節障害の重症化するケースが増加しています。この病気は頭痛、眩暈、立ち眩み、朝起きられないといった症状があり、重症患者の増加は社会問題になりつつあります。重症化の原因の一つとして、長期間運動をしないことによる身体機能の低下を示す「デコンディショニング」という状態があるとされています。この状態の解消には、運動が有効であると言われていますが、症状からも、立った姿勢での運動や運動へのモチベーション維持は難しいと考えられます。そうした課題にアプローチすべく、本研究では起立性調節障害を持つ中高生が楽しく運動できるようにするためのゲームを開発・検証しています。	本ゲームの開発においては、「どのように患者さんに遊んでもらうか」や「いかに患者さんの手にゲームを届けるか」といった課題がいくつかあります。また、本ゲームはほぼ 1 人で開発しているため、技術的にも至らない点はあるかと思いますが、このような課題に関して、また、本ゲームの活用方法について、様々な議論ができれば幸いです。また、本イベントを通じて、起立性調節障害や起立性調節障害患者を取り巻く環境や、不登校などの社会課題について、少しでも多くの人に知っていただけるよう、努めたいと思っております。至らない点もあるかと思いますが、よろしくお願ひいたします。
4 佐藤 ふう 奈良女子大学人間 文化総合科学研究 科生活工学共同専 攻 D1	「弓道の身体運動学的計測に基づく握り及び握り革の評価」 弓道で使用する道具の性能評価を行っています。弓道の和弓の握る部分である「握り」とそこに巻く「握り革」というグリップテープの使用感を定量的に評価する手法の確立、システムの開発を目指しています。現在は、弓を引いている際の握り部分にかかる押下圧の計測やモーションキャプチャでの姿勢変化の計測、握り革に働く摩擦力の計測から定量評価基準を設定することを目標とし、研究を行っています。	弓道という一般的でない競技を扱った研究なので、競技者以外へ研究の意義を説明し、理解していただくことは常に課題であると感じています。本イベントの参加を通じて、研究の意義を分野外の方へ伝える力を身につけたいと考えています。また、様々な方から意見をいただくことで、研究について今一度深く考え、自分の取り組みを見つめ直す機会としても考えています。当日はどうぞよろしくお願いいたします。
5 岡安 美穂 お茶の水女子大学人 間文化創成科学研 究科 M2	「産前・産後の就労継続に伴う女性の労働と健康に関する研究」 スウェーデンの Aronsson らが提唱したプレゼンティーズム（体調不良・病気で休養を取り休んだほうが良いにも拘わらず仕事に出る状況）という概念について 2000 年頃より北欧と米国を中心に研究が行われています。現代社会において誰もが健康に働くことができる、従業員の健康を守ることは必須の課題であると考えています。特に私は、就労継続しながら妊娠・出産を経験する女性たちについてその健康状態と職場復帰後に抱えている課題について研究しています。本研究の意義は、女性の労働と健康について質的に社会的視座から検討することで、第一に、仕事と育児の両立において、女性自身は健康をどう認識・対応し、就労継続との関係性をどう捉えているのか。第二に、妊娠・出産・育児を経験する過程において、なぜ健康的に就業継続することができる人とできない人が存在するのか、議論するものです。	「ジェンダー・イノベーション」というアプローチをご存じでしょうか。この概念は米国ロンダ・シーピンガー氏が提唱し、「性差と交差性の分析の創造性によるイノベーションと発見」と説明されます。本研究は、助産師である研究者自身が医学的知見のもと産前産後の就労継続の実態を明示するものですが、また「ジェンダー・イノベーション」に通ずるものと考えています。妊娠・出産する身体とは自然科学的に女性特有のものであり、産前・産後の就業継続において性差に着目することは必然的です。学際的かつ産学連携の場で私の研究紹介を行い、多角的なご意見をいただきたく思います。
6 津代 啓佑 東京都立大学都市 環境科学研究科環 境応用化学域 D1	プロトン交換膜型光触媒によるエネルギーおよび物質変換 今は光触媒電極を用いた水分解により光エネルギーを化学エネルギーに変換したり、常温で化学的に安定なメタンをエタンなどの有機物に変換したりする反応を研究しています。自分が扱う反応器はプロトン交換膜を電解質として利用しているため、電解液が不要であるという特徴があります。この特徴を活かすことで、メタンなどの水に溶けにくい気体を反応させることができています。また、プロトン交換膜によって酸化反応を行う光電極と還元反応を行う電極が空間的に分離されており、光触媒系に比べて生成物の分離工程を簡易化することができます。現在は水分解やメタン変換反応の改良をしていますが、将来的には上記に挙げた特徴を活かせる他の反応を模索したいと考えています。	本イベントでは多様な業種の企業が参加されると聞き及んでおり、視野を広げて新しい反応系や光触媒の応用先を考える良い機会だと感じています。特に自分は有機合成や医薬品業界には疎いので、その業界の方と意見交換できることを期待しています。プロトン交換膜型の反応器であれば、疎水性の溶媒を使った反応系でも光触媒は進行するのではないかと思っています。また反応器に限らず、光触媒電極に注目する方との交流も楽しみにしております。現在は気相反応に指向した、ガスが拡散しやすい形状の基材に光触媒を担持した電極を用いています。化学工学的な視点から今の電極形状が最適なのか、もしくはよりガス拡散に有効な形状はあるのか気になっております。本イベントでより多くの業種の方とお会いできることを楽しみにしております。